

第七回

分百七十八の詩

— 受賞作品集 —

羽
生
市

募集にあたって

「四里の道は長かった。その間に青縞の市の立つ羽生の町があった。田圃にはげんげが咲き、豪家の垣からは八重桜が散りこぼれた。」で始まる田山花袋の小説『田舎教師』の作中において、成願寺和尚山形古城の名で登場する太田玉茗は、明治詩壇前期において、島崎藤村や国木田独歩とともに、日本の近代詩史に名をとどめた新体詩人の一人でありました。

この太田玉茗を顕彰するとともに、詩の素晴らしさを全国のみなさまに伝え、詩を通して文化の発展の向上に寄与することができればと考え、新体詩人のふるさとの地でもある羽生市が、「ふるさと」をメインテーマに「詩」の全国募集をおこなったものです。

目次

◎受賞作品集

太田玉茗賞 一篇

「丸木橋」

金子三郎

群馬県みどり市……………6

優秀賞 五篇

「勝瀬橋」

岡部晋一

神奈川県横浜市……………10

「河口の橋」

くりすたきじ

和歌山県和歌山市……………12

「洗心橋」

田中聖子

神奈川県藤沢市……………14

「言葉」

ふくもりいくこ

千葉県野田市……………16

「飛び込め」

渡邊照夫

埼玉県鴻巣市……………18

佳作 十篇

「渡る」

浅野亨

三重県名張市……………22

「希望の橋―国立療養所の島を訪ねて―」

井上直美

岡山県赤磐市……………24

「記憶の中の橋」

上田由美子

広島県広島市……………26

「大谷橋（だいや橋）」

尾崎昭代

埼玉県所沢市……………28

「吉林大橋」

蟹澤義久

埼玉県羽生市……………30

「神崎橋から」

真田正章

兵庫県姫路市……………32

「蛇の川」

殿岡秀秋

千葉県船橋市……………34

「時代劇」	福地順一	北海道札幌市……………	36
「ゆれる橋」	保坂純子	神奈川県川崎市……………	38
「流れない時間」	松下かおる	神奈川県大和市……………	40

市民奨励賞 三篇

「コンパス」	金森孝枝	埼玉県羽生市……………	44
「昔そこにめがね橋があった」	春山信雄	埼玉県羽生市……………	46
「八つ橋の上で」	水野栄子	埼玉県羽生市……………	48

◎ 講 評

「橋」をめぐる多彩な抒情世界	石原武
----------------	-----

◎ 選考委員紹介

石原武	新川和江	中村稔
-----	------	-----

◎ 推薦委員紹介

新井豊美	飯島正治	菊田守
木坂涼	北岡淳子	

◎ 資 料

経 過
募 集 要 項
応 募 状 況

第七回

少室山詩

太田玉茗賞

丸木橋

金子三郎

前の山と後ろの山に、
物干竿が架かると言われた村に、
毎年杉の丸太を半分に伐った、
小さな丸木橋が新しくなった。
丸太は細い川なのにしつかりと、
藤の蔓で結えられた。
山仕事に登る人は、
ここで一升瓶に水を汲んだ。
瓶が木苺に触れると、白い花が散った。
丸木橋は一日中音を聞いていた。
木を倒す音、炭俵や薪を運び出す音。
丸木橋に腹這いになった子供達の賑い。
でも、静かになる一時もあった。
そんな時翡翠かわせみの鋭い目が光った。
夕暮になると、きまって青葉あおば梟ずくがホーホーと
村人を呼び続けた。
暮れて来ると、丸木橋付近から、

蛍が湧くように飛んだ。
蚊帳へ入れた蛍をよそに、
子供達は寝入るのだった。

やがて丸木橋に冷たい風が吹き込んで、
雪を運んで来た。
まっ白になった丸木橋の上に、
りすやいたちの足跡が、小さく付いた。
その跡を仕事帰りの、地下足袋が消すと、
丸木橋の冬の日が終るのだった。

第七回

・
心
算
七
上
の
詩

優

秀

賞

勝瀬橋

岡部晋一

勝瀬橋は
相模湖にかか
る
だが勝瀬とい
う地名は
この地上には
存在しない
あるのは湖の
底に
沈黙を続けて
いる
旧津久井郡日
連村勝瀬
醤油屋
絹問屋
清の上戸
屋号で呼びあ
った村人たち
は
人造湖の建設
とともに
心の奥深くに
集落の歴史を
封印し
四散して消え
た
ある年

渇水で
村の廢墟が
湖底からあらわれた時
父は勝瀬橋の上から
喪失した故郷に
鎮魂の涙を落した

祭の笛や
せせらぎや
釜ヶ淵の河童を
すべて棺に抱いて
父は天に昇った

ボートを漕ぐ若者の笑い声や
釣人の清浄な沈黙を
湖は抱きしめて静かだ
勝瀬橋の上を吹く風は
もう秋だ

河口の橋

くりす
たきじ

よく晴れた冬の
つん、と冷えた河口の橋をわたれば
とおく海がみえた

あの日、はじめて
あなたの背にしがみついて橋をわたった
黒いオートバイは無口な父と子をのせて
貨物船の油がしみこんだ潮風のなかを走った
河口の近くに立ちならぶ高炉の輪郭が
滲んでとぎれるあたり
こぼれおちた冬日をひろい集めて
白くかがやく水平線の
海の高さになぜか目をうばわれた

貧しいということばが
かがやいていた時代に
あなたは河口の街のみらいを原寸で画き

鉄を灼き、鉄を曲げてその短い生涯をとじた
残された少年は
あなたとすごしたわずかな月日を
語ることさえできずに生きてきた
それは、たったひとつ手にした誇りであり
あなたを亡くしたくやしきであり
ひとり生きる懸け橋として
けっして錆びることの許されない
鉄の橋であった

河は今日も絶えることなくひくく長閑に流れ
雑多な日々のくらしの垢や
いく度となく投げ捨てた記憶のかけらを
海へとはこび去った

ふるさとの人びとのくらしを支えつづけて
河口の橋は一世紀を生きぬいた
海の高さはあの日とおなじ
みらいを見つめるそのたしかな視点は
あなたの笑みの高さとおなじだったと
いつの日か、少年は気づいていた

洗心橋

田中聖子

小樽 母の生まれた港町
かつて私も家族と住んでいた―
小さな橋の傍だった

冬になると橋の下の水の流れは
川に捨てられた雪で覆われてしまう
春に雪解けの匂いがすると
スキー場の雪も解け始め 一気に水嵩を増し
運河まで轟轟と流れて行くのだった

少年時代をここで過ごした子供たちは
今 怒涛のような雪解けの川と同じ
厳しい社会の中で生きている
小樽はよかった と息子たちが言うとき
心に橋が架けられ いつとき
懐かしい人々や自然へと渡って行くようだ

母よ 術後のあなたの涙と笑顔が目には浮ぶ
水の流れを追うように運河まで
遡るように天狗山まで
生きていることに感謝して一緒に歩いた
そうして転勤生活の私たちの心にも
源流のような故郷が生まれた
あの洗心橋あたりから

言葉

ふくもり
いくこ

週に一度のハンゲル講座
全貞善先生のお国ではいつでも

「アンニョンハセヨ」※

日本へ嫁いで初めての朝
隣のおばさんに「今晚は」と言ってしまった
以来 人と話すのが怖い
誰からも逃げるように過ごした日々だった

「私にもお役に立てることありますか」
ハンゲルを教えることで日本語がわかった
公民館での講座は十年になるという

韓国へ嫁いだ娘の新しい家族と話したい
三年前 貞善先生と出会った

「タリは橋 足の意味もありますよ」
日本でも足りる 橋脚という言葉がある

家族^{カザリョウ} 安心^{アンシン} 宇宙^{ウツジュ}など
時には全く異なる考え方をしながら
発音のよく似た言葉を重ね合う隣国

家族となり師弟となり
互いの心を浩くして私たちはどこまでも
支え合って生きていくだろう

生まれたばかりの小さな孫 浩^ホ伸^{シン}に
いつかハンゲルの絵本を読んでやりたい
浩伸につながるずっと前の
おじいちゃんやおばあちゃんたちのことも
わらべうたも歌ってやりたい

覚えきれない未知の天空を
とまどいながらゆっくり伸びていく
私の言葉の架け橋

※アンニヨンハセヨ（お早うございます。今日は。今晚は。）

飛び込め

渡邊照夫

鷹橋の欄干から飛び込めたら一人前

それが子どもらの暗黙のルール

野通川やどおりをそのまんま

二つ橋ふたつばしほど流されて

馬避橋うまよけから上がると

また鷹橋たかばしに引返す

飽きもせず

毎日毎日、繰り返す

「野郎、水浴びなんぞ承知しねえど」

長男を川で死なせた

親父の小言はおつかねえけど

このまんまでいたら

いつまでたってもみそっかすだ

ほら、街道けえどの方で

いつもの顔が

いくつも見え隠れして誘いに来ている

だから
田圃仕事にくたびれ果てて
親父が泥のように昼寝を始めると
「いぐど、いぐべえ」
炎天下の中、走り出す

日暮れ時

家の中の様子を伺いながら
こそそと潜り込むと
「だらしねえ野郎だ、が・し・ゃ・ぎにやんねえと、
なんにもできねえぞ」
酒臭い息を吐きながら
親父に、ぎろりと睨まれる

明日こそは飛び込むぞ
暗闇に蒲団の襟をぎゅーと掴む
今日だってもうちよつとだったんだ
それは
まだ「少し」がどれほどの差か知らぬ
まだ「明日」を信じていた頃の話だ

第七回

・
分
百
七
也
詩

佳

作

渡る

浅野 亨

川向こうの駅へ
ただ足速に渡り始める
飾り気の無い小さな橋を
コンクリートの古びた橋を
渡ると言う動詞が形になっただけの橋
何気無く川を見下ろす
白い葉裏を見せて草が中州に揺れる
青いキャップが釣竿を回す
岩の鈍い色があちこち流れを分かつ
淀みが水面を眩しく光らせる
少し離れ並んでもう一つ鉄の橋を
丁度電車が音を低くして渡る
その橋の背に遠く紫の山
渡る電車を目で追う
ふと今渡って来た橋を振り返る
見慣れた橋と広がる町並
遠く山々が縁取る天空の下

小さな町の小さな古い橋
今渡って来たのは私と婆さんの手押車
畑で採ったばかりの野菜を積んで
今渡って行ったのは
自転車の作業服と
母親に連れられた幼児の黄色い風船と
茶色の犬を連れた学生服
住む人が渡る
住む人の想いが渡る
声が、音が、色が、光が、風が、時が渡る
人と織り成す全てが橋を飾る
渡って来た橋が急に美しく見えた

希望の橋―国立療養所の島を訪ねて―

井上直美

穏やかな光と風を受け静かに佇む島
納骨堂の鐘の音が島全体に響き渡る
一層大きくなった夕日が西の海に沈む
えもいわれぬ風景に何の不思議があるう

一人の年寄りが重い口を開いた
昔、ある若者が

故郷の母に一目会うために宿舎を抜け出した
目と鼻の先の本土に泳いで渡ろうと

監視の目を盗んで飛び込んだ
潮の流れが速く辿り着けない

やがて追っ手の櫓に掬われ、牢に監禁された

昭和の終りに、悲願の大橋が完成した

「人間回復の橋」と名付けられた

それでも我々は

自由の身となって故郷に帰れると小躍りした

一度は縁を切られた故郷に墓参りをする
感激にむせび泣くが、親はずでに亡く
親類縁者も風景も、不確かな記憶のみ
もはやここは故郷ではなかった
長い年月によって美化された架空の故郷
何を願ひ、何を求めていたのか――

橋ができて早くも二十数年

我々も歳を取り、運転もままならぬ
断種、子降ろしの施策のため子孫もない
が、もう誰を恨むということもなくなつた
本土を繋いだ橋は、今度は人々の心を繋いだ
春になると、粹のよい魚を求めて釣り人が
夏になると、地元の子供会の盆踊り
秋になると、こうして中高生の勉強会
あの五分とかからぬ橋を渡ってやって来る
我々亡き後、ここを訪れた者たちが

「第二の故郷」と思うてくれたらそれでええ

コバルトの海が、歴史ごと緑の島を包み込む
太古から続くこの風景に何の不思議があるう

記憶の中の橋

上田 由美子

そこに 決して渡れない橋がある
私の人生を一本の橋が横切っている
川は日ごとに澄んだ水を流し続けている
そこに架かった一本の橋は時間の止まった
空白の時間を背負って川をまたいでいる

その橋には 今でも女学生たちが
八月六日のヒロシマの中にいる
人間の形が壊され真黒い顔 顔 顔
微かに開いた片方の目から途切れかけた命が
姉を探す私に静かに微笑んで目を閉じた

橋は何も語ろうとはしないけれど
その橋を見る度に
歳月は押し戻され欄干の隙間から
この世に残した苦しみの血の色を吸い取って
夾竹桃が死者たちの床を見守っている

橋の向こうには街がある
夜になると赤い灯青い灯が
騒音の中でまたたき
光の帯を川面でたゆたう死者の影に流し
川風がヒュールヒュールと鳴きながら
橋を通り抜けていく

橋は何も語ろうとはしないけれど
過去からの叫びを 未来への胸騒ぎを
抱きかかえながら静かに横たわっている
もしも いつかこの橋を通れる時が来たなら
始めも終わりも見えない死者の
霊境への迷路をたどるように
祈りを唱えながら渡ってみよう

記憶が時空の彼方に消えるまで
心の襷を突き刺し
私の人生を横切る一本の橋
人間の愚行の枠に縁どられた
一枚の橋の絵が今もそこに掛かっている

大谷橋（だいや橋）

尾崎昭代

大谷川（だいや川）という溪流に架かっていた橋
大谷橋だったか他の名前だったか　もう思い出せないが
確かに　架かっていた木の橋

橋の山側が　ふるさと
山のふもとの小さな社宅の集落が
子供の世界のすべてだった

野原には　白やむらさきの花が咲き乱れて
ミズナラやカラマツの葉がキラキラして
夜は星星が飛び交っていた
それが　世界のすべてだったのです
橋を渡るまでは

― 山のあなたの空遠く
という詩を読んだ十九歳のわたしは
橋を渡ってしまったのです

ふるさとを離れて

不思議なものけたちの棲む

都会というところにやってきた

魔物もいたけれど 王もいて王子もいて

わたしは 私を見失ってしまいそうになったり

でも 本物の詩人にもであって

― 幸いすむという

その幸いが見つかつたかどうかわからないが

鉢植えのパンジーが置かれた狭庭を眺めて

ほとんど星が見えない夜空の下

目立たない詩を書きながら

ふるさとの古い木の橋が

天の河に架かつたカササギ橋のように

きらめいて見えることがあります

吉林大橋

蟹澤義久

十七歳の少年がもらった辞令は
日本国満州拓殖公社・吉林地方事務所勤務
入植した開拓団に分配する
農地の測量が任務

ゆったり流れる松花江のほとり
四月 春が一気に舞い降りて 芽吹く柳
広大な大地にしっかりと脚を踏ん張り
大きく弧を描いて渡る吉林大橋 長さ一〇〇〇m余り
欄干にもたれて 湧き上がる望郷の思いを
柳の枝とともに 何度流れに投げ捨てたか

一か月の研修を終えると
開拓団を巡る長期出張が始まった
果てしない荒野 測量機を担いで東奔西走
血の汗を流せば流すほど ホームシックは
黄砂もろとも天高く舞い上がっていった

渡満五か月 ソ連軍が突如侵攻してきて占領
続いて八路軍に引継がれた
家財は略奪 住処も追われ 着のみ着のまま
山野を逃げ回ったすえ 吉林に戻り潜んだ
また燃え広がる国府軍との内戦 暗黒の大陸

ある日夕暮れ 次々に耳をつんざく爆発音
建物と大地を揺り動かす 激震と爆風
敗走する八路軍が 吉林大橋を爆破した
総ての橋脚は根元から吹き飛び
橋桁は幾つにもへし折れて 水中に跪いた

あれから六十五年 記憶の回転ドアを押すと
満州の京都といわれた心の故郷・吉林が思い出される
悠揚せまらず流れ下る松花江
そこには今 どんな立派な橋がかかっていることだろうか

かんざき
神崎橋から

真田正章

神崎橋から北を望めば
ゆるやかな川の流れの
その先に
岩山が見える
それに腰かけ
川で毛脛すねを洗う大男
少し手前の
左岸に見える駒ヶ岩
そこで、祖父は
ガタロに出会ったという
五十年前の夏
わたしは
橋を駆けて渡った
ちらと上流に目を遣ると
子供が何人か泳いでいた
流れる汗をもものともせず

左に曲がると

全力で走った

やがて、畑仕事をする

祖父が見えてきた

「おじいちゃん——」

「おお、よう来た。よう来た」

祖父はわたしを担ぎ上げると

遊園地の飛行塔のように

その場で回った

わたしは小さな飛行機になった

夜の九時に二人で寝ると

祖父は

怖い話をしてくれた

一つ目小僧や

ガタロに尻を抜かれそうになった話

千束せんぞくの巨人の話……

神崎橋から北を望めば

今も

ゆるやかな川の流れ——

ガタロも、子供たちも

もういない

蛇の川

殿岡秀秋

隅田川は天井川で

千住の街から川面は見えない

母の知り合いの子が

釣りをしているで溺れ死んだ

川岸に菩提樹の若木を植えてみんなで拜む

小学校入学前のぼくが土手の上からのぞくと

黒くて巨大な蛇が光る

あわてて川がみえないところへ

あとずさりして母の手を握る

蛇に向って花輪が投げられる

近くに大きな鉄骨アーチ橋がある

「この橋は貴方のお祖父さんが作ったのよ」

と母がいう

小学生になって千住大橋の近くをとおるとき

同級生に自慢した

「この橋はぼくのお祖父さんが作ったんだ」

「ええ、そうなの」

大きくなってから母に確認した
祖父は馬車で建築資材を運搬したという
それをフツウ作った人とは呼ばないだろう
とそのときは思っただけでも
エジプトのピラミッドを作ったのは
奴隷ではなくて職人たちだ
祖父は施工主でも建築家でもないが
橋を作ったひとりであった

巨木に育った菩提樹を見てから
千住大橋を歩いて南千住にわたる
真夏の照り返しをうけて光る歩道を
頬かむりした人が馬車を引いて現れる
荷車に若いころの母がいてぼくに手をふる
「あなたのお祖父さんよ」

母は馬の手綱を持つ人を指さす
ぼくは蜃気楼に揺れる馬車を見送ってから
隅田川を覗く
蛇は腹に死者の魂を呑みこんで昼寝している

時代劇

福地順一

岩木川の富士見橋ア
コンクリートの永久橋ネなたの
昭和三十二年三月だネ
そえまでは木橋であた
木橋の橋桁が見だ岩木山
良エ眺めだつたなア

紺屋町の木橋の袂ネ
太エ黒松の木一本あた
その黒松ネ寄り掛がる様ネして
岩木やの提灯ぶら下げで
枳屋根の粗末な一杯飲屋あた
古ぼげた無地の暖簾一枚下がた
未だ街道も舗装されでねぐ
橋も飲屋の前も砂利道であた
その富士見橋の傍の飲屋がら

頭サ^{アタマ}頬^{ホウ}被^カりして
首サ^{ウタ}手拭^{テヌキ}巻^マえで
犬^{イヌ}の毛^ケ皮^ヒ背^セ中^{ナカ}ネした親^オ爺^ト
顔^{ツラ}少^シし赤^{アカ}くして出^デて来^キた

雨^{アメ}パラパラど降^フてだ

年^{トシ}増^マの女^メ将^{サマ}

又^{マタ}来^キて呉^ケへ

て、傘^{カサ}ば渡^ワした

親^オ爺^ト空^{カラ}模^モ様^{サマ}気^キネしながら
片^カ手^テで番^{バン}傘^{カサ}ぱつと開^アえだネ

ああ、時代劇の映画観てるえんただったなア

ゆれる橋

保坂純子

私の記憶の最古の橋は
いつもゆらゆら揺れている

岩手の山奥のまた山奥の
ダム工事現場の暮らし
どこかに行こうとすれば
山道を遠回りするか
ゆらゆら動くつり橋を渡るか

小さな小さな私は父とともに
張られたロープに両手でつかまり
一歩一歩進んでいく
足を動かすたびに
前後に左右に、ゆらゆら、ぐらぐら
自分自身が揺れて
おののきながら歩いたのだ

並べられた床板の隙間から
気の遠くなるほど遙か下の谷底に
音もなく岩をぬって流れる水
躓つまずいて足から外れたくつは
一瞬にしてすうっと落ちていき
河原の上に小さく残ったまま
ずっとそのままだった
今もそのままだろうか

あの頭からしびれるような
恐ろしさよ

鮮やかに揺れる私のつり橋よ

渡れば、ふるさとに入れ

抜ければ、

ふるさとから逃れることができた

懐かしくて淋しいふるさとよ

けれど、あのつり橋はなくなった

もう私は、あのふるさとは帰れない

鉄で造られた誇らしげな橋では

しっかりと微動もしない橋では

あのふるさとは、たどり着けないのだ

流れない時間

松下 かおる

いちめん夕焼けだった
空も田畑も家々も
遠くに一筋 橋が横たわっている
橋の上を人影が 一列になって 走って行く
男の細い人影を先頭に
後を追って行く 小さな子供達の群れ
子供達の歓声がかすかに聞こえる
故郷の橋の記憶はこの一枚の映像だけ
ハンメルンの笛吹きのような一枚の絵は
就学前の子供心深くにしまわれたまま
上京して時は流れた

十七才の歴史の時間
聞かされた被差別部落の話
日本に古くからあった差別や朝鮮人のこと
その時 訳も知らずチクリ痛みを伴って
体のどこかに沈んでいた一片の記憶は

突然　すとん　腑に落ちたのだった

終戦直後の田舎町

家の近所に黒いトタン塀の屠殺場があった

近くを通ると終日

動物を焼く厭な臭いが漂っていた

傍に長屋の続く一角があった

周囲より明らかに貧しい佇まい

あそこの子達と遊ぶんじゃないよ

耳元で町の大人たちが囁いた

ハンメルンの笛吹きではなかった

子供達は一人の男を追いかけ回していたのだ

幼さの残酷　無知の残酷

総括してしまう老いた胸に

また　チクリ　痛みが走る

第七回

市民獎勵賞

市民獎勵賞

コンパス

金 森 孝 枝

また ここに戻ってきたんだ
友達の声が ぼとりと 水面に落ちる
波紋が時の扉を開く

小学校を出るまで

世界は川の隣にあり

全ての距離の尺度は橋で計られていた

羽生の町を 西から東へ

縦に まっすぐつつ切って行く葛西用水

横町っ子はシンボリと呼び 横町はシンボリにかかる

城橋から始まる

しろばしから 三軒め

キング堂のたーちゃん は 三つ

橋から数えてちょうど十番め ときわぎ屋さんで

はじめてのおつかい

傘が歩いているように見えた

祖父は 晴れた日の朝 橋の真ん中で

パシッ パシッ 柏手を打つ

銀の髪が光っている　祈っていた
きらいなマラソンは
小学校橋から大天白の橋をくるりと回る
はあつ　はあつと精いっぱいの息の音

夏

川俣小学校から城橋までシンボリを流れてくる度胸だめし
たちはだかる橋の数

流れに　暗い深さに負けて　這い上がった土手の高さ
きりきりした太陽

ある日　まっ白に空の全てを染めた

うすばかげろうの大　大飛行

欄干からおそるおそる覗いた彼らの最後

この橋から去っていた年月

何も手にできず　くるっと円を描いて

戻ってきた　橋のたもと

けれど

こぼれてくる　かけらのひとつひとつが

私をつくり　橋を形成しているのだ　と知る

キング堂のたーちゃんは

またもや　橋のかけらを集め始めるのだ

先へ

流れに乗って

昔そこにめがね橋があつた

春山信雄

昔そこにめがね橋があつた
灼けつくような夏の日
川辺りの農家の鬱蒼とした繁みは
木蔭が色濃く
めがね橋を覆っていた
利根川から誘引された水は
取水口から耳を劈く轟音となつて
用水路に噴き出し 次の瞬間
水は一定の隊形を整え
いつきに用水路を下る
ほどなく二つの弧を象つた
めがね橋がじつと構え そこに
激流が先を争うように
吸い込まれていく
めがね橋は さながら
村の古老を思わせた

がき大将を先頭に五・六人の子どもらが
利根川の堤を駆け上がった
ジャンケンが始まる

その群れの中に自分もいた

「一番機突つ込め！」がき大将の

号令が凜然と自分の背中を突いた

子ども心に取水口の堤から用水路まで

十メートルほどはあつたらうか

眈を決し自分は脚から飛び込んだ

ジーンと鼻の奥を痛烈な刺激が走る

一、二、三足を蹴り上げると

頭が水面を突き破った

ヤッタゾー！ 必死の勇気が

誇らしさに変わるのを感じた

目の前にはめがね橋が迫っていた

その表情はいつになく

微笑かけるように優しかった

今、水路はいつしか護岸となり

あのめがね橋はもうない

八^やつ橋の上で

水野栄子

三年前 夫が西へと旅立ち
もう私の前には誰もいない
空ろな心で訪れてしまう水郷公園
八つ橋を浮かべた宝蔵寺沼
羽生のシンボル ふるさとの顔

沼への道 羽生―栗橋線は 母たちの八つ橋
南へ折れれば生母と暮らしたふるさとの家
少し先を北に折れると継母のふるさどがある
左に折れると夫と二人養子縁組した養母の里

昭和二十年 二歳半だった私に残された
生母の温もりがこもる小さな包
祖母がしまったのは箆笥の一番上の抽斗
手も届かず気がかりな儘時は過ぎ
やがて新しい母が出来
継母の明るい声で暮らしは華やいでいった

養母が遺した箆笥の三段目の抽斗の奥には
義兄の戦死を知らせた戦友からの手紙
昭和二十年五月 宮古島で
ワイルドキャット機からの機銃掃射を受け
血にまみれた地図のかたわらで
皇国の安泰を祈りつつ逝ったとある

独りの寂しさに 思い出すのはおぼろな生母
小さすぎた私には何も語れず去った後ろ姿と
養母が時折うずくまり震わせていた背
思い返しながら 八つ橋に佇んでいると
隣接している沼で冬眠しているむじな藻の
ひそかな息遣いが聞こえてくるようだ

こよなく澄んだ冬の宝蔵寺沼
慈しんでくれた三人の母や夫や家族たちが
蒼穹を分け光とともに降りてきて
励ますように震わせている小波のきらめき
微かに揺れる八つ橋の上で 精霊たちに誓う
終焉の日までしっかりと生きて行く と

講

評

石原

武

「橋」をめぐる多彩な抒情世界

石原 武

「橋」という言葉は人生の様々の局面のイメージを喚起します。希望や失意、出会いと別れ、それらの情景が誰にとっても切実なものとして想起されるはずで、「橋」のメタファでうたわれた文学作品が多いのはそのゆえでしょう。なかでも、詩の名品も多く、たとえば、萩原朔太郎の「郷土望景詩」（『純情小曲集』）の一篇「大渡橋」などすぐに心に浮かびます。

ここに長き橋の架したるは

かのさびしき惣社の村より 直として前橋の町に通

ずるならん。

われここを渡りて荒寥たる情緒の過ぎるを知れり

詩を書き始めた頃、このように始まる「大渡橋」を思わず声を上げて読んだものでした。この詩は次のように続いています。「往くものは荷物を積み車に馬を曳きたり／あわただしき自転車かな／われこの長き橋を渡るときに／薄暮の飢えたる感情は苦しくせり」

故郷に帰り着いて、その故郷と離反せずにおれない詩人の孤独の声、読むたびに心に響いてきたものでした。

第七回を迎えた「ふるさとの詩」は、全国から七五二篇の応募があり、「橋」というテーマへの共感をうかがわせました。これらの応募作品は、推薦委員会の慎重な選考を経て、七十七篇が選考委員会に推薦されました。

四月十一日、さいたま市の共済会館で選考委員会が開かれ、私、そして中村稔委員、新川和江委員からそれぞれ受賞作品候補が提案され、長時間の討議の上、受賞作品が決定されました。

応募作品の多くに、過ぎた時代への郷愁と現代文明への反発という類型があつて、詩の言葉や文体が萎縮している傾向があるのは残念でした。

たとえば、木橋からコンクリートへという枠組みの中からは澁漈とした想像力は育ちようがありません。過去も現在も未来も、日常の時間を越えて、人と事物をしつかりと見据えるのが詩の出発だと思われれます。

太田玉茗賞に決定した金子三郎氏の「丸木橋」は過去と現在という類型に囚われずに、山間の小さな村の丸木橋と村人の暮らしを凝視しています。川の流れも翡翠も夕暮れのアオバズクも、丸木橋を中心に深い神話的な世界に読者を誘います。風が運んできた雪に、「まっ白になった丸木橋の上にノリすやいたちの足跡が、小さく付いた」と、透明な詩風景は深まります。太田玉茗賞にふさわしい名品といえるでしょう。

優秀賞の岡部晋一氏の「勝瀬橋」は、相模湖に架かる橋。勝瀬というのはその湖底に沈む村の地名だといえます。醤油屋、絹問屋、四散した村人の沈黙の上に架かる勝瀬橋を、作者は理知的な描線でスリリングにうたっています。優秀賞のくりすたきじ氏の「河口の橋」は、「河口の橋をわたれば／とおく海がみえた」と、詩風景の扉を開きます。海の水域高いその街で、鍛冶職人として短い生涯を生きた無口な父への思いを、河口の鉄の橋の確かな存在感に重ねています。詩情の深い作品です。

優秀賞の渡邊照夫氏の「飛び込め」は、欄干から川へ飛び込むことで、〈みそつかす〉から一人前になれる子ども挑戦の息遣いを鮮やかに描いています。とくに「長男を川で死なせた」親父の悲しく複雑な胸のうちを表現する筆致は非凡です。

優秀賞のふくもりいくこさんの「言葉」は、お隣り韓国とのところの交流を〈言葉の橋〉を通して経験していくさまを清潔な筆致で描いています。かの地に嫁いだ娘と、生まれた孫への思いを込めた「アンニョンハセヨ」の発音の明るさが読者に伝わります。

優秀賞の田中聖子さんの「洗心橋」は、港町小樽の小さな橋、雪解けの水を集めて轟々と流れる川に架かる橋、そのイメージが鮮烈で、時代を生きてきたみんなの心の橋のように思われます。

佳作作品の上田由美子さんの「記憶の中の橋」は、ヒロシマの「決して渡れない橋」への鎮魂の祈りの詩篇として優れていました。福地順一氏の「時代劇」は、東北方言の奏でる親爺と女将の表情の人間味は魅力的でした。真田正章氏の「神崎橋から」は、祖父から聞いた「ガタロ」の話を淡々と民話調に語っています。殿岡秀秋氏の「蛇の川」は、隅田川は天井川なので、土手のなかを蛇のように光っているというのです。題から戦慄的で詩の力量を感じさせましたが、ただ、残念なのは千住大橋建設に資材を運搬した祖父の話と、主題が分裂しているという指摘がありました。尾崎昭代さんの「大谷橋」は、記憶のなかの木橋が、遠く離れた都会にあつて、「天の河に架かったカササギ橋のように」きらめくという美しいメルヘンです。浅野亨氏の「渡る」は、川向こうの駅へ渡っていく人々の生活の表情が生き生きとしたリズムで描かれています。井上直美さんの「希望の橋―国立療養所の島を訪ねて―」は、かつて残酷に断絶を強いられた島の、人間回復と次代への希望が明るく歌われています。松下かおるさんの「流れない時間」は、子供達を引き連れた男が、ハンメルンの男のように、橋を渡る場面から詩が始まります。ところが、それは被差別部落の男をいじめる子供の群れだったという懺悔が詩の主題です。心に残る作品です。蟹澤義久氏の「吉林大橋」は、スケールが大きい作品で、この構想力は非凡です。暗黒の大陸、満州で経験した悲劇を背景に、吉林大橋の印象が鮮烈です。保坂純子さんの「ゆれる橋」は、岩手の山奥のゆれる橋の遠い記憶を現在化して、父と故郷を引き寄せています。故郷というものの実体に触れる思いがします。

市民奨励賞として、金森孝枝さんの「コンパス」、水野栄子さんの「八つ橋の上で」、春山信雄氏の「昔そこにめがね橋があった」の三篇が選ばれました。「コンパス」の、距離の尺度を橋で計る羽生の街、その記憶のコンパスを回し、鮮明に現在化した佳篇です。「八つ橋の上で」は、宝蔵寺沼に架かる八つ橋に立って、作者は〈来し方行方〉について思索を深めます。「昔そこにめがね橋があった」は、利根川の取水口から用水路まで十メートルの落差を飛び込む、少年時代の冒険譚を闊達にうたっています。

選考委員紹介

石原 武（いしはら たけし）

生年月日 昭和五年（一九三〇年）八月三日生

出身地 山梨県 甲府市

詩集に『軍港』（第一回横浜詩人会賞受賞）、『離れ象』（日本詩人クラブ賞受賞）、『夕暮れの神』（埼玉文芸賞受賞）、『これからしばらくの夜』、『飛蝗記』（第四回現代ポイエーシス賞受賞）、日本現代詩文庫『石原武詩集』ほか。評論集に『詩の原郷』、『遠いうた』、『遠いうた拾遺集』（第七回日本詩人クラブ詩界賞受賞）、エッセイ集に『君を夏の一日に譬えようか』ほか、訳書に『ケネヌ・パッチェン詩集』、『手で育てられた少年』など多数。

元日本詩人クラブ会長、埼玉詩人会会長、文教大学名誉教授。

埼玉県

越谷市在住

新川 和江（しんかわ かずえ）

生年月日 昭和四年（一九二九年）四月二十二日生

出身地 茨城県 結城市

県立結城高女在学中より、詩人の西条八十に師事。詩集に『ローマの秋・その他』（第五回室生犀星詩人賞受賞）、『比喩でなく』（土へのオード13）、『火へのオード18』（水へのオード16）、『ひきわり麦抄』（第五回現代詩人賞受賞）、『けさの陽に』（第十三回詩歌文学館賞受賞）、『新川和江全詩集』、『生きる理由』など多数のほか少年少女詩集がある。エッセイ集に『花嫁の財布』、『朝ごとに生まれよ、私』、『わたしは、此処』などがある。

その他、小学館文学賞、日本童謡賞、丸山豊記念現代詩賞、藤村記念歷程賞、産経児童出版文化賞、現代詩花椿賞など多くの賞を受賞している。

日本現代詩人会、日本ペンクラブ、日本文芸家協会会員。地球同人、元日本現代詩人会会長、産経新聞「朝の詩」選者、結城市名誉市民。

東京都

世田谷区在住

中村 稔（なかむら ゐのる）

生年月日 昭和二年（一九二七年）一月十七日生

出身地 埼玉県 さいたま市

旧制一高を経て、一九五〇年東京大学法学部卒業。一九五二年弁護士登録、現在に至るまで弁護士を業とする。旧制一高在学時から詩作を始め、一九五〇年処女詩集『無言歌』を刊行。その後、詩集に『鶉原抄』（高村光太郎賞受賞）、『羽虫の飛ぶ風景』（読売文学賞受賞）、『中村稔詩集一九四四—一九八六』（芸術選奨文部大臣賞受賞）、『浮泛漂蕩』（藤村記念歴程賞受賞）、『新輯幻花抄』等がある。その他、中原中也全集の編集に関与、『中原中也私論』、『宮澤賢治』等の評論、『故園逍遙』、『日の匂い』等の随筆、『束の間の幻影—銅版画家駒井哲郎の生涯』（読売文学賞受賞）の評伝などがある。井上靖文化賞、毎日芸術賞、朝日賞など多くの賞を受賞している。日本近代文学館名誉館長、全国文学館協議会会長、日本芸術院会員。

埼玉県

さいたま市在住

推薦委員紹介

新井 豊美（あらい とよみ）

生年月日 昭和十年（一九三五年）十月十七日生

出身地 広島県 尾道市

知的な手法をもつ女性詩人といわれており、詩集に『波動』、『河口まで』、（地球賞受賞）、『いするまにあ』、『半島を吹く風の歌』、『夜のくだもの』（高見順賞受賞）、『切断と接続』、『草花丘陵』（晩翠賞受賞）、現代詩文庫『新井豊美詩集』などがある。そのほか、『苦海浄土の世界』、『女性詩』事情、『近代女性詩を読む』、『女性詩史再考』等の評論集がある。

日本現代詩人会会員、日本文芸家協会会員、元早稲田大学第一文学部兼任講師。

東京都 国立市在住

飯島 正治（い い じ ま ま さ は る）

生年月日 昭和十六年（一九四一年）九月二十三日生

出身地 神奈川県 横浜市

「薇」同人。詩集に『帰還伝説』（鶴見工房）、『無限軌道』（風社）、『二日月湖』（花社）ほか。その他絵本に『森はふるさと』、ノンフィクション『どろんどろん』がある。

埼玉詩人会元理事長、大宮詩人会会長、国際学院埼玉短期大学客員教授、埼玉新聞社社友。

埼玉県 さいたま市在住

菊田 守 (きくた まもる)

生年月日 昭和十年（一九三五年）七月十四日生

出身地 東京都 中野区

学生時代に安西冬樹の「春」に心動かされ、詩を書き始める。詩誌「花」、「鳥」同人。平成六年（一九九四年）十一月、愛知県豊橋市制定の第一回丸山薫賞を詩集『かなかな』（花神社刊）により受賞。著作として他に詩集『妙正寺川』、『白鷺』、『仰向け』、『一本のつゆくさ』、『天の虫』、新・日本現代詩文庫『新編 菊田守詩集』等、エッセイ文庫『夕焼けと自転車』など多数。

元日本現代詩人会会長、丸山薫賞選考委員、前橋「若い芽のポエム」選考委員、日本文芸家協会会員、日本ペンクラブ会員、日本現代詩人会理事。

東京都 中野区在住

木坂 涼（きさか りょう）

生年月日 昭和三十三年（一九五八年）七月三十日生

出身地 埼玉県 東松山市

新鮮でユニークな作風が注目を浴び、詩集に『ツツツツと』（現代詩花椿賞）、『金色の網』（芸術選奨文部大臣新人賞・埼玉文芸賞）、『五つのエラーをさがせ！』、『刺繍日記』、『音の箱舟モーツァルト』ほか。
エッセイ集に『ペランダの博物誌』、翻訳絵本『ワイズ・ブラウンの詩の絵本』など多数。

日本文芸家協会会員

東京都 板橋区在住

北岡 淳子（きたおか じゅんこ）

生年月日 昭和二十二年（一九四七年）一月三日生

出身地 長野県 長野市

詩誌「白亜紀」、「ERA」、「未開」、「薇」同人。詩集は『冬の蝶』（詩集作品より、三善晃氏作曲女性合唱曲集「街路灯」）『水または鳥』、『生姜湯』（日本詩人クラブ新人賞受賞）、『サンジュアンの木』（埼玉詩人賞受賞）『アンブロシア』他がある。日本詩人クラブ（前理事長）、日本現代詩人会、日本ペンクラブ、日本文藝家協会、他会員。

埼玉県 入間郡毛呂山町在住

資 料

経 過

実行委員会 募集企画の決定（平成二十一年六月）

第七回ふるさとの詩の募集題材は、「橋」とし、全国募集を行う事を決定した。

募集要項・啓発方法の検討（平成二十一年六月）

羽生市のホームページに掲載し、啓発に努める。

募集開始（平成二十一年十一月）

全国の図書館、文学館及び詩人団体・マスコミ等へ募集要項を送付し、啓発を依頼した。

募集締切（平成二十二年一月三十一日）

推薦委員会（平成二十二年三月六日）

あらかじめ配布した応募作品の中から、優秀作品を選考して持ち寄っていただき、石原武先生を委員長として推薦委員会を開催した。

選考の結果七百五十二篇の中から、七十七篇を推薦選考した。

選考委員会（平成二十二年四月十一日）

石原武先生・新川和江先生・中村稔先生にお集まりいただき、選考委員会を開催した。

推薦委員会で選考した七十七篇の中から、太田玉茗賞一篇、優秀賞五篇、佳作十篇、市民奨励賞三篇の合計十九篇の入賞作品を選考した。

入賞者発表（平成二十二年四月二十二日）

定例記者会見において、入賞者を報道機関へ発表した。

表彰式（平成二十二年六月十二日）

入賞者、選考委員並びに推薦委員の先生、そして関係者の方々にお集まりいただき、表彰式を開催した。

第七回 ふるさとの詩

募集要項

心に描くあなたのふるさとの「橋」を一篇の詩にして応募してみませんか。

募集作品

- ・ふるさとの「橋」を題材とした未発表のオリジナル作品。
- ・作品数は一人1篇とします。

応募方法

- ・市販の400字詰め原稿用紙B4縦書、本文・表題で2枚以内の作品。
(パソコン等のものは原稿用紙マスごとに印字してください)
- ・別紙に郵便番号・住所・氏名・年齢・性別・電話番号を明記してください。
なお、ペンネーム使用の場合は、本名も書き添えてください。
氏名には必ずふりがなをつけてください。
- ・選考結果通知のため、住所・氏名を記入し、80円切手を貼付した返信用封筒を必ず原稿と一緒に送りください。

応募資格

- ・資格は問いません。ただし、中学生以下の方は除きます。

締切

平成22年1月31日 (当日消印有効)

選考委員

新川和江・中村 稔・石原 武

推薦委員

新井豊美・飯島正治・菊田 守・木坂 涼・北岡淳子

発表

平成22年4月に通知。

賞

- 太田玉茗賞… (1篇) 賞状・盾・賞金20万円
- 優 秀 賞… (5篇) 賞状・盾
- 佳 作… (10篇) 賞状・盾
- 市民奨励賞… (3篇) 賞状・盾

その他

- ・入賞作品の著作権は主催者に帰属し、作品は返却いたしません。
- ・二重応募はご遠慮ください。
- ・選考に関する問い合わせには応じられません。

主 催

羽 生 市

応 募・問い合わせ

〒348-8601 埼玉県羽生市東6丁目15番地

羽生市役所 秘書広報課『ふるさとの詩』募集実行委員会事務局

TEL 048(561)1121(内線204) FAX 048(562)3500

<http://www.city.hanyu.lg.jp/> Eメール hisho@city.hanyu.lg.jp



第七回 ふるさとの詩応募状況

1 男女別 / 年代別 [単位:人]

年代	男	女	計
10代	6	23	29
20代	26	43	69
30代	32	43	75
40代	42	61	103
50代	69	87	156
60代	97	79	176
70代	73	30	103
80代	16	9	25
90代	1		1
不明	6	9	15
小計	368	384	752
総計			752

※最高年齢 90歳、最少年齢 16歳

2 都道府県別 [単位:人]

県	人数	県	人数	県	人数	県	人数
北海道	24	東京都	79	京都府	23	高知県	2
青森県	13	神奈川県	40	大阪府	43	福岡県	14
岩手県	6	新潟県	16	兵庫県	43	佐賀県	1
宮城県	14	富山県	3	奈良県	9	長崎県	3
秋田県	4	石川県	9	和歌山県	6	熊本県	8
山形県	7	福井県	6	鳥取県	6	大分県	6
福島県	10	山梨県	6	島根県	1	宮崎県	4
茨城県	15	長野県	11	岡山県	9	鹿児島	2
栃木県	14	岐阜県	6	広島県	16	沖縄県	3
群馬県	18	静岡県	20	山口県	7	イギリス	1
埼玉県	102	愛知県	36	徳島県	7		
(うち羽生市20)		三重県	16	香川県	9		
千葉県	36	滋賀県	9	愛媛県	9		
						合計	752

実 行 委 員 (五十音順)

塩田 禎子

萩原 澄江

原山 喜亥

平野 文子

宮内 芳子

矢辺 竹雄

第七回 ふるさとの詩 受賞作品集

発行 平成22年6月12日

編集 ふるさとの詩 実行委員会

発行者 羽 生 市

埼玉県羽生市東6丁目15番地

Tel 048-561-1121(代)
